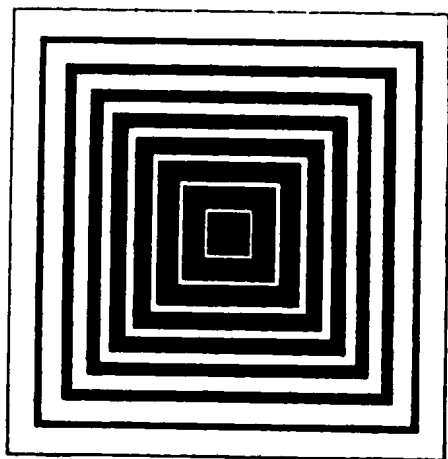




南総里見八犬伝

白井喬二訳



日本の古典—23

河出書房新社

日本の古典 23

南総里見八犬伝

昭和四十六年九月二十五日 初版発行

昭和四十八年十一月二十五日 三版発行

訳者 白井喬二

装幀者 亀倉雄策

発行者 中島隆之

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地

電話 東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

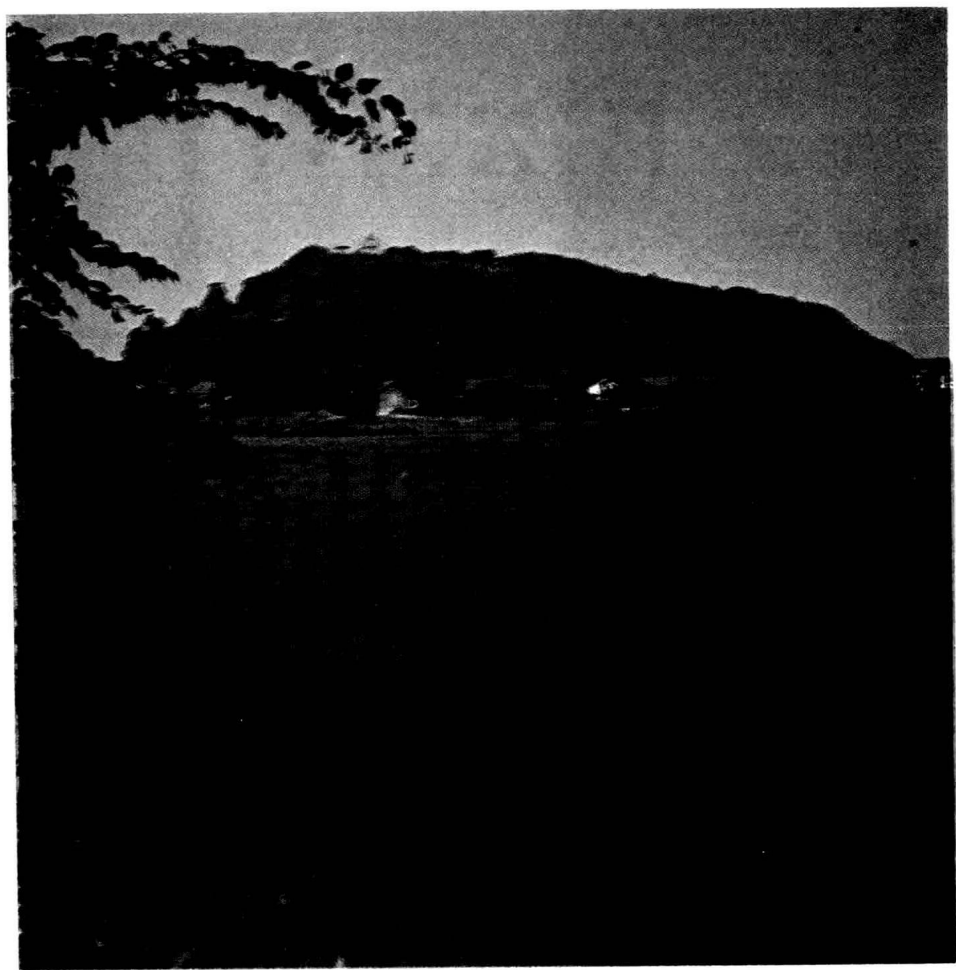
製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロス 日本クロス工業株式会社

定価はカバー・帯にあります

©1973



曳見氏の居城・館山城趾

目次 南総里見八犬伝

南総里見八犬伝……………白井喬二訳 一七

〈作品鑑賞のための古典〉

滝沢馬琴

回外剩筆

殿村鑑斎

犬夷評判記

……………柴田光彦訳 三三

解説 多田道太郎 三

解題 柴田光彦 三六

注釈 池田弥三郎 三八

年表 柴田光彦 三六

挿画・カット 中島清之

解説写真 榎原和夫

解説

反文明的小説「八犬伝」

露伴というのは、よほど見識のある人物だと感心してしまふ。

「八犬伝」中、左母二郎という人物は、もしこれが京伝や三馬の筆にかかれれば「意気で野暮でなくって、物がわかった、芸のある、婦人に愛さる可き資格を有して居る、宜しいもの」として描かれていたはずだ。ところが馬琴の筆によると、「一種の色男がり、器用がり、人の機嫌を取るこ」とが上手で、そして腹の中は不親切で、正直質朴な人を侮蔑して、自分に変な一種の高慢を有している」そんな人物になってしまふ。これが露伴の解釈だ。(馬琴の小説と其当時の実社会)つまり、馬琴の小説では江戸っ子は形なしだというのである。私はまあ、京生まれの京育ちであり、江戸・東京には恩も怨みもないが、しかし、そういうわれるとそんなものかなあと思ひ当る節もある。

江戸・東京はどうも「関東」ではない。あれは異様の都会である。都会である以上、「一種の色男がり、器用がり、人の機嫌を取ることが上手で……」といった人物が、とりわけ遊里などでちやほやされることは理の当然であつて、江戸・東京にくらべれば小さな都会にすぎない京都でも、やはり事情はあんまり変らない。

関八州はさいはての地である。一步向うはもう太平洋で



あつて、文明も文化もあつたものではない。こういう地にしがみついて、それこそ「正直質朴」に暮らしていった、暮らしてゆかざるをえなかった人びとの目に、左母二郎輩が一個の好男子と映るはずがない。

「南総里見八犬伝」は、仮りに馬琴の筆を借り、関八州の漁民、農民が恨みのかずかずを噴出させた、一種の反文明的小説であらう。

『八犬伝』挿画。八犬士と、大法師が描かれている。右の一番上の犬塚信乃その下の犬坂毛野が女装している。『大夷評判記』で問題にしている箇所。



馬琴の肖像。(東京大学国文学部蔵「戯作六家撰」より)

り、動物の小説である。ただふつうの「動物文学」とちがうのは、いわゆる動物文学が人間の眼で動物を見ているのに対し、ここでは、動物の眼が人間を見ている趣きがある。擬人化ではなく、擬獣化である。これがけっきょくは、関東者の眼で江戸者を見ていることになる、私など、思っているのだが、しかしまあ、結論を急いでしまうと、「解説」のていをなさないので、ぼちぼちと参ろう。

前田愛氏はその秀抜な論文『「八大伝」の世界』（『文学』一九六二年十二月号）において次のように述べた。

「……『八大伝』の世界は、文字どおり『物類相感』の世界なのである。人間と動物、人間ときまざまな自然物は交感し、呼応し、融合し、また闘争する。死者の霊は輪廻転生をとり、ふたたび現世によみがえる。過去、現在、未来ははつきりした境界をもたず、相互に滲透しあっている。アニミズムの世界といいかえてもいい」

私もまた「八大伝」の世界をアニミズム的世界と呼びたい気持ちにかられる。たしかに「物類相感」の世界である。しかし、人と獣、さらに獣どうしのあいだにさえ、厳たるけじめのごときものがそこにはある。それは封建的桎梏にも似た宿命的けじめである。つまり、猫はあくまでも猫であり、虫はあくまでも虫である。

私もまた、かつて広津和郎を論じてアニミズムに至ったことがあった。以下引用する。

幸田露伴によると、京伝だの三馬だの一九だのという人は「並行線の作家」であり、それに反し、馬琴は「杉や櫓が天をむいて立つように、地平線とは直角をなして」いる作家、つまりは「垂直線の作家」であるというのが、馬琴が時代と社会にたいし「垂直」に交わることができたのは、関八州の目で文化文政の江戸を眺めることができたからにほかなるまい。

「八大伝」は上方文化、江戸文化に拮抗する、ほとんど唯一の「関東文学」である。

ところで「八大伝」という小説は、「名詮自性」、文字通

「生命のうごきはとらえどころのないものである。複雑で不透明でぐにやぐにやして、何とも得体の知れないものである。しかし動物の生命のうごきは、しばしば単純で直截である。われわれの生命感をそうした動物の生命のかたちのうえに重ねて、美的な認識となぐさめをうるとするのは、わたしたちの、とりわけ私小説家の知恵である。広津和郎もまた、そうした知恵者の一人である。／人間と動物とをきっぱり分つ文化ではこうした知恵は生じようがない。われわれの文化では、どのような下等動物も、それぞれの『分』に応じて『生命と価値とをもち、そしてその生命と価値とは、連続的に、切れ目なしに人間にまでつながっている。もちろん、げじげじと人間とをひとしなみに見ることはできない。それぞれの『分』はある。秩序はある。しかしまったくの非連続ではないから、ときに視点を自由に移動させることで、『虫のいろいろ』と人間とのあいだにさえ共鳴が生じうる」(『文学者流の考え方』一九六一年)

こうして自分の昔の文章を写していて思うのだが、視点の自由移動というようなものが「本来の」アニミズムにあったものだろうか。アニミズムとは、さまざまの生きもの、自然のあいだに共通の絆のあることを感知することであり、その絆というところにのみ、人びとの想いはあつたはずである。とすれば、それぞれの「分」をみとめたうえで、視点を自由に移動させるというのは、妙を承知でいえば近代的アニミズムといったものではなからうか。あるいは、アニミズムの近代版といったほうがいいか。

ということで行くと、馬琴の世界はアニミズムの封建版、なのである。動物のあいだのどうしようもない「分」こそ、「八大伝」の軋轢、葛藤、闘争を形づくるのである。ということは、動物が共感しあう状況に感嘆するのは



馬琴生誕の地。深川平野町、海辺橋際、現在の深川警察署付近。

なく、動物がおのおの「けじめ」を守り、因果応報によって、あるものは盛え、あるものは減んでゆく、この世のさまを嘆すべきではないのか。

「八大伝動物園」ということを言いだしたのは円地文子氏であるが、この動物園に棲む動物たちの「けじめ」を考え、この小説の基本的骨格を考えることとなる。

円地氏のあげたのは、「竜」「犬」「狸」「猫」「狐」「虎」の六種である。この六つの動物が主な登場人物であることに文句はないが、なかで「狐」はちょっと別格である。

狐とは言うまでもなく、不忍池のほとりに棲む政木狐のことであって、彼女は河鯉守如に受けた恩を忘れず、河鯉孝嗣の乳母に化け、正体見破られたのちも善果をつみ、二十年後にまた孝嗣を救うという感心な狐。

これは動物の報恩話の系統中にあり、人間・動物感應のいい事例だろう。つまりは、「本来の」アニミズムが不意によりがえっている個所がこの政木狐のくだりであって、アニミズムの封建版ではない。「八大伝」としては異質の挿話である。

のこる五種の動物のうち、「犬」は、もちろん小説の主題でもあり、主人公である。これはあとでふれるとしての



そくと、あとは「竜」「狸」「猫」「虎」である。「竜」は動物とはいいながら、むしろ精神界の王者である。

「義実海面を指して、向は雨いと烈しくて、立騒ぎたる浪の間に、叢雲頻りに廻翔り、彼岩のほとりより、白龍の昇りしを、木曾介は見ざりし歟」と問れて直と足を跳龍とは認め候はねど、あやしき物の股かとおほしく、輝かやくと鱗のごときを、僅に見て候、といへば義実うち點頭、さればこそその事なれ。われはその尾と足のみ見たり。全身を見ざりしと、憾むべく惜べし。夫龍は神物也。変化固より彊なし」

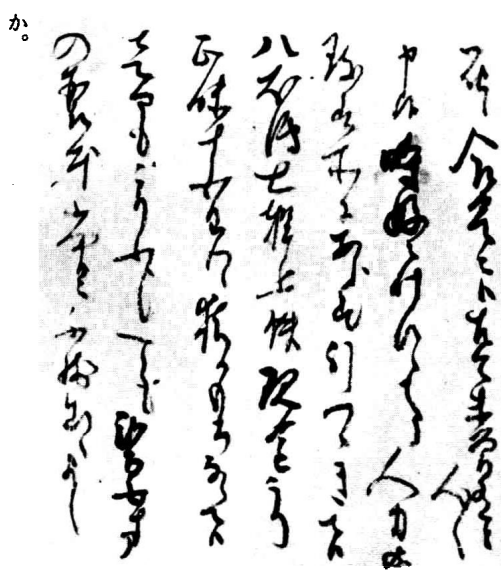
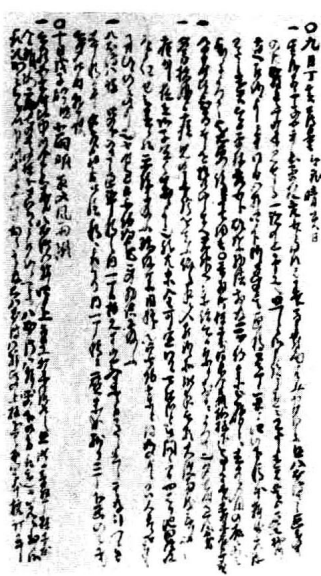
『八大伝』第八卷一の挿画(上)と、原稿に馬琴自身が描いた、挿画指定。(早稲田大学図書館蔵)

竜は神物なるゆえに、政木狐も長年の陰徳により、天帝のおぼしめしで狐竜となるというわけだが、この竜の「高位」にくらべ、「八大伝」中の「虎」はまことに哀れである。

大江親兵衛に討取られるくだりは次のようである。

「恠てぞ虎は両眼共に、射られて其窮手に堪へねば、立地に衰へ果てて、才に其尾を動かすのみ。親兵衛は是を見て、得たり、と馬より下り立ちて、走り近づき、右の拳を、握り固めつ、虎の眉間を、三四礮と搏ちしかば、李広が弓勢、馮婦が強力、両ながら得たりける、勇士に勝つべき由もなく、虎は脳骨砕け皮陥りて、軟々として斃れけり」

悪人ばらししか襲わなかったという虎が、なよなよと斃れてしまふとは、まことに哀れであるが、おそらくこれは、けものにかすぎぬけものであったためであらう。巨勢金岡の画いた掛軸の虎が、瞳を点じられたため暴れだしたという、一見、「文化」的な因縁あるゆえに、かえって獣性にとどまったのは、哀れというべきか、皮肉というべき



か。ともかく、精神そのものを「竜」とすれば、獣性、あるいは肉体そのものは「虎」である。この竜虎の間に、精神でもなく肉体でもなく、しかもそのいずれともいえる中途半端の動物たちがいる。これが物語の主軸となる猫であり、狸である。

私が「八大伝」で一番好きなのは、富山のくだりと庚申山のくだりである。どちらも人獣姦愛がテーマである。一方では八房が伏姫に懸想し、他方では化け猫が何人もの妾と淫楽にふける。

「猫」とは何か。「八大伝」ではそれは淫楽のことであり、姦愛のことである。なぜ「姦」なのか。もちろん「分」を

殿村養素にあてた、馬琴の書簡の一部。『八大伝』第七轉上巻の初版二五〇部が即日売り切れたということが書かれている。（早稲田大学図書館蔵）

馬琴の天保三年の日記の一部。『八大伝』第八轉の挿画の指定をして、それを画工に渡したという意味のことを書いています。



わきまえていないからである。政木狐のように狐同士、愛しあっていたら、何ということもないのに、庚申山の怪猫は、神通自在、山神地神まで召使同然にこきつかう実力をもちながら、不幸にして「人間」に懸想してしまった。赤岩一角の後妻窓井に思いをかけ、一角に化けて夜ごとに枕をかわす。

「憐むべし後妻窓井は、変化不測の妖獣を、良人と思ひて夜毎々々に、枕の数も累りて、牙二郎と名づけたる、男子を産たれども非類に膚を穢されし、精液漸々に衰へて、三十に足で身まかりたり。是よりして後飯一角は、妾夥買易て、只淫楽を旨としつるにその妾等は、いく程もなく或



は、精気を吸耗されて、一とせも経ず死するものあり」

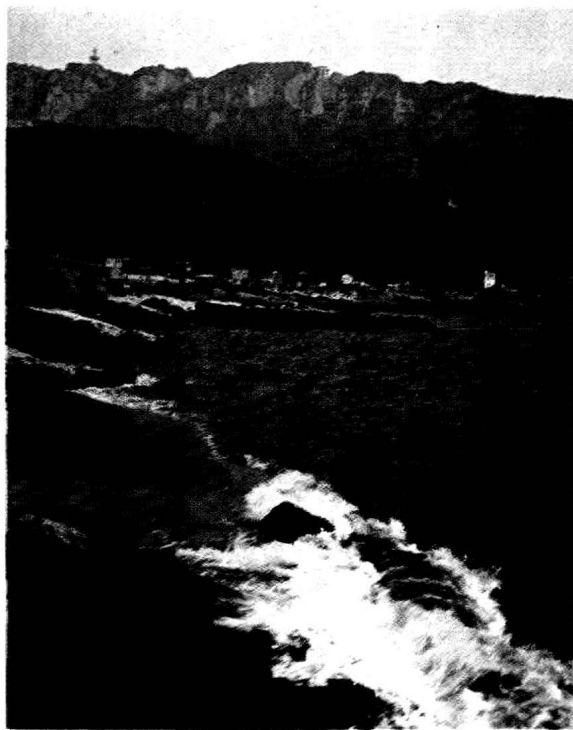
むかしも今も、こういう心を獣心というが、しかし、厳密な意味の獣心は、もちろん、他種と交わろうとは欲しない。ただ「分」をわきまえざるの本能が、恨みが、ひがみが、あわれにも「けじめ」を忘れさせるのである。

そこで獣の子に外ならぬ牙二郎が、父化猫の霊玉に撃たれたのに逆上し、「悖逆不孝の角太郎、妻離衣と謀し合して、親を害する人面獣心、其処な動きそ」と絶叫すると、読者は奇異にも、滑稽にも思わずにいられない。

滑稽に思うのは、もちろん、化猫の子にはかならずぬ牙二郎が「人面獣心」などと言うからであり、奇異に思うのは、

千葉奥富山の奥にある
伏姫、八房が籠ったと
いわれる洞窟。

結城氏朝の居城・結城
城趾、里見季基は、い
わゆる結城の合戦で敗
れ、息子義実を安房へ
落とす。



は、「人面獸心」にほかならぬ牙二郎が人間に向い「人面獸心」と罵倒するとき、はたして何が「人面人心」であるか、その「けじめ」は何か、心もとなく、覚束なく思えてくるからである。その断、その答えを下しうるのは、おそらく靈玉のみであり、また、靈玉を享けた犬士のみであろう。

というわけで、怪猫が血まみれで憤死するとき、ひとは人獸のあかしを目のあたりして一安心、しかし、そこにもがいているのが、自分の「心」ではないかという、凄惨な疑いを感じずにはいられない。

「物の響と恩愛の、その氣や自然に通じけん、死せしと見

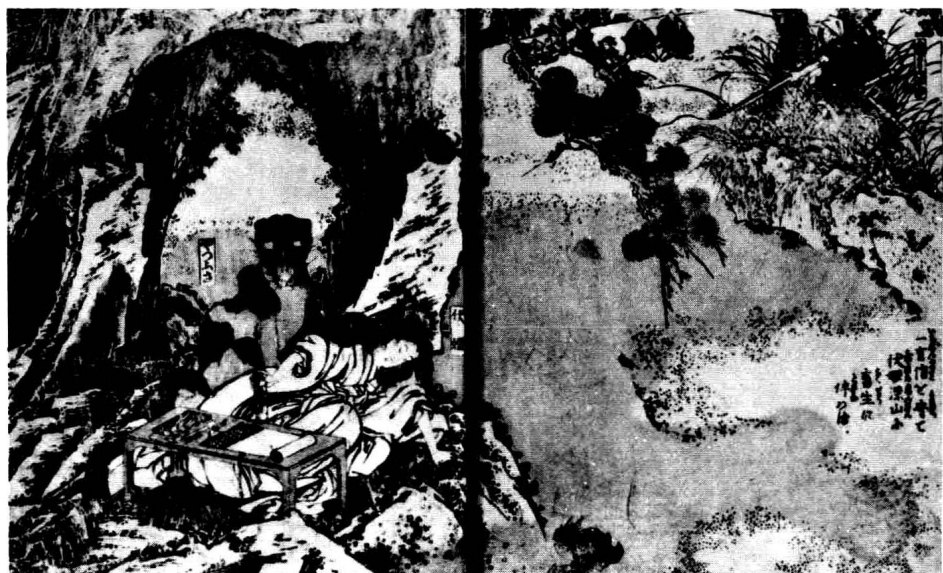
えたる仮一角は、忽地嘯く声震動して、障子紙子も裂くるが如く、雙手を張つて身を起せば、はじめに異なる奇怪の相貌、既に年老る山猫の、形体を露す面部の斑毛、眼の光は百煉の、鏡を並べ掛けたる如く、影然として長く鋭き、髯は宛ら雪を串く、枯野の芒に異ならず。耳まで裂けて凄じき、口は血を装る盆に似て、牙を鳴らし爪を張り、四下を疾視んで咄く息は、狹霧となりて朦朧たる、庵の中は雲に入る、月下の宿歟、と疑はる」

「四足の人非人」——「悪」の壮絶な大往生である。「悪」は朦朧とあたりをつつむ狹霧となる。四面、ために暗いのである。

「八犬伝」が勤善懲惡の文学であるという、これはもう文句のない名札に、今さら文句をつけるのではないが、ここには壮絶な「悪」がないという説は、どうしても首肯できない。「悪」のモラルはないとしても、「悪」の美学は、したたかに味わされるはずである。ついでに少し飛沫をあげておけば、「八犬伝」は美学の問題だといった鋭利な觀察をした花田清輝氏が、三枝園の尻馬にまたがり、次のように述べているのは、いささかふしぎである。

「作家は、味方の眼で敵をみるとともに、敵の眼で味方をみることにしていなければならぬ。したがって、作家にとっては、敵も味方も、おなじ重要さをもつ、かれの作品の大事な主人公なのである。しかるに、馬琴の作品のなかには、敵をみる味方の眼だけしかなく、あるばあいには、敵は無名のまま、ほ

里見家再興を夢見て、
里見義実主従が上陸し
た安房の鋸山の偉容。



とんどまったく黙殺されてしまっているのだ。(中略)馬琴もまた、トルストイと同様、露伴のいわゆる『胸中の人物』にだけ熱をあげ、『邪悪の人物』や『端役の人物』を、ともすれば、いいかげんにしがちなタチだったのである。そして、それが、かれらの小説の最大の欠点になっていることは、いま、ここで、わざわざ、くりかえすまでもあるまい」(『もう一つの修羅』)

私の思うのには、「八大伝」中、最大の敵役は、八房に乳をのませた狸であり、諏訪の社頭の大樟のうつろに住み、徹底的に里見をにくみ、物語の末尾においてなお、妙椿に変化するという、あの怪物であろうが、しかし、この狸、いわば「悪」の黒幕であって、いかにもボスらしく、ほとんど姿を見せはしない。したがって、物語中、最高の働きをする「敵」は、やはり仮一角の化猫であって、彼一箇でもって、優に八大士に匹敵する重みをもつ——というのは、私のひいきのひき倒しであろうか。しかし、見よ、庚申山において、仮一角がのどを突かれて絶息してよりは、「八大伝」の生彩とみに衰え、とりわけ大江親兵衛のおとぎばなしふうの一人舞台となつてからは、物語の凄惨美は、ほとんどうせてしまっている。ということは、つまり、花田氏のいう「敵」が庚申山以前には、陸離と光りを放っていたにもかかわらず、化猫死んでよりは、仁の玉のみたいな光りを放ち、ために、物語の闇の光明(闇そのものが光りかがやくという美学)は色褪せてしまったということではなからうか。

もともと三枝園は、「八大伝」に登場する悪人ばらの名の、いかにも作り名じみているのに、不満の意をあらわし

『八大伝』挿画 富山の奥に隠った伏姫は、八房の重宝をうけて、八大士を宿す。
「姫はある日、石井戸をのぞいて、はっとした。たしかに自分の姿であるが、頭が大のように見えたからであつた」
(本文第二輯十二回)

ていたのであるが、たしかに、墓六だの、船虫だの、無宿猫野良平だの、聞くからにおぞましい名を次つぎと出されては、「名は体を現わさず」と思っている近代的読者には、仰々しい作りものと思えない。

しかしこれは、馬琴が「悪」や「敵」というものを軽視していたためではないので、むしろ、事實は逆である。「名詮自性」は彼の哲学の中枢にあり、名が体を現わさないのはむしろおかしい。

もちろん「名詮自性」は「敵」についてあてはまることではなく、味方の善人もまた、「犬にも及ばぬ大輔が、大の一字をそがまゝに、大と法名仕らん」というわけであり、なによりも、小説の要となる八房という名が、里見義実の「解説」によれば「件の犬の全豚に、黒白八つの斑毛あれば、八房と名つけしが、今さら思へば八房の、二字は則一戸八方に至るの義なり」ということになる。

ここで注目すべきことは、「今さら思へば」という一句であって、前田愛氏の指摘のごとく、「予言としての名詮自性は一例もない」のである。因果応報は人智の及ぶところにあらず、名よりして、あらかじめ運命を知ることとは不可能なのである。とはいふものの、事がすでおこってみれば、やはり「名詮自性」であって、なるようにしかなくない。ここに、人世のおそろしさがあると馬琴は言おうとしているのであろうか。

それはともかく、悪人ばらが忌わしい獣類、虫類の名を冠せられているのは、もちろんアニミズムの世界のことであって、あえて異とするには当たらないが、しかし、それにしても、下等動物の名がもつばら当てられているのは、これまた「名詮自性」であって、獣の中にもやはり、上等等の「けじめ」のあることが、「今さら思へば」思いあた

るというものだ。

なかでも、私の心をひきつけてやまないのは、毒婦船虫であって、これはおそろく、仮一角の化猫に次ぐ個性的人物。この女のみが、仮一角の宿業のごとき淫欲によく耐えたというのもうなすける。そして、仮一角の亡きのちも、さらに業は衰えず、「名詮自性」、船虫のごとく、豊島の司馬浜の浜辺に打出て、客をひく。「その（客の）懷裡に東西あるをば、鱗合の折辱を、まじへて舌を嚙断り殺して、尸骸を海に棄る」という悪業。

この悪に報い、悪を倒すのは、鬼牛と名づけられた猛牛。人間と牛が闘うのではない。ここは、アレゴリではない。「船虫」が、牛と闘うという凄惨な場面。だが、虫と牛



「八犬伝」挿画。大塚信乃、大飼見八が、お互いにお互いを知らず、芳流閣屋上で決闘する。

では勝負にならない。
無残にもふみにじられる
そのくだり。

「道節これを左見右見て、五大の兄弟思はずや、此船虫媼内は、尋常の罪人ならず、その悪古今に稀なれば、身は生ながら地獄に墮て、今此閻王殿前にて牛の角に劈る。前面に地蔵ありといふども、救ふによしなき大群の、決断恁こそあるべけれ、といへは信乃は牛の身辺に、進み寄つゝつらく見て、嚮に此牛の主と聞えし、鬼四郎が云々、といひ誇りしにて初めて知りぬ、こは多からぬ逸物なれば、村人們が主の名を、搭してこれを牛鬼と、喚做けんも名詮自性、牛頭馬頭冥府の獄卒に擬んべかりける、自然の妙契畜生也ともこゝろあらは、此義を思ふて主の仇なる、賊夫賊婦を劈けかし、心を得よやと町寧に、論せば小文吾現八は、牛の後に立よりて、手をもて、尻を礮と拍つ、拍れて勇む牛鬼は、ものこそはぬ媼内と、船虫を、信と睨へたる。程しもあらず那をも此をも、長尖れる角をもて、腋下より肩尖まで、串き劈く怒牛の勢ひ、地獄の呵責を目前に、受て苦む船虫媼内、眼血走る顔の色、赤くなり又蒼くなりて、腹に波うつ大叫喚、申がるゝ事数番にて、やうやくに息絶しかば、



有繁に勇む六犬士も、此光景に肅然と思ずも目を合しけり」

さて、肝心の犬である。犬は、船虫よりは優れた動物であらうが、狐、狸、猫と変りない畜生である。犬畜生といつて畜生呼ばわりの代表とされることもある。侍の劣ったのを犬侍といい、警察の犬などともいう。私たちはいったい、犬をどう思っているのか。しかし、考えてみれば、犬のような奴とは、飼主にもっとも忠実な存在ということでもあり、人間から見た犬は、親愛と蔑視の二面性を兼ね備えているように思われる。

『八犬伝』版本の一部。
色とりもあざやかな表紙は、見るからにたのしい。(早稲田大学図書館蔵)

『八犬伝』原稿。馬琴が眼病を得て、息子宗伯の嫁・路女に口術筆記させた。右ページは馬琴の自筆、左ページは路女の筆。(早稲田大学図書館蔵)



ところで、逆に犬のほうからみればいかなものか。犬は畜生の一つにちがいはないが、それでも及ばぬながら人間の仲間として、他の動物たちと闘い、忠義のイデオロギ―をあらわそうとする。畜生仲間にあるまじい裏切りであるが、この二面性こそ、犬を、狐や猫などと分つ特長といえる。

——といった、下手な大談議をはじめたのは、もちろん、犬土のことを傍想しているからなので、犬はアニミズムの世界にあって、そこから脱出せんとする妙な人間臭をもった動物だということである。と考えてくれば、「八犬伝」はアニミズム小説としては、後世の鏡花のそれのような正統ではなく、むしろ「犬」を中心とする、アニミズムからの脱出の努力とみられなくもない。

八房は畜生ながら、伏姫に恋慕し、伏姫とその父に約束の実行を迫る。彼は伏姫を誘うことで人間たらんとしたのであろうか。しかし、もちろん、その間には超えがたい「けじめ」がある。八房がおのれの「獣欲」に苦しむくんだり、滑稽でもあり、哀れでもある。「八房は近くも得よらず、只惚々と姫の顔を、臥して見つ、又起きて見つ、舌を吐き、涎を流し、或は毛を舐り、鼻を舐り、只喘ぐこと頻りなり」

いっせいにじらしい恋慕の表情といえようが、若干の気の弱さをのぞけば、仮一角の化猫の「獣欲」と、いったいどこに変わることが

安房平群の風景。現在も、当時を彷彿とさせる鄙びた、静かな盆地である。



あるのか。

ちがうのは、仮一角がおのれの「分」をわきまえず、人畜交婚の罪を恬として犯したのにたいし、八房が姫の高貴に打たれ、かなわぬ恋の片おもい、ひたすら姫につかえ、「かくまもりつめて明しつ、その旦八房は、とく起きて谷に下り、木果蕨根を采りて、銚みもて来て、姫君にぞまゐらす」という忠勤ぶりである。

しかし、八房は忠勤をつくす「犬」としてとどまっていたのではない。恋慕の「氣」がのこる、それが伏姫の胎内に入つて八つの子を姙ませる。これは人畜交婚の果ではないのか。そうではない。仮一角の化猫的獸心は、いったん否定されている。否定されることで、かえつて「氣」は靈妙な玉を姙ませる。もし獸心がそのまま満たされたならば、「人面獸心」の子を姙むことはあつても、八つの玉をみごもることはなかった。

八房は、伏姫の菩提心のゆえに、獸性を否定され、否定

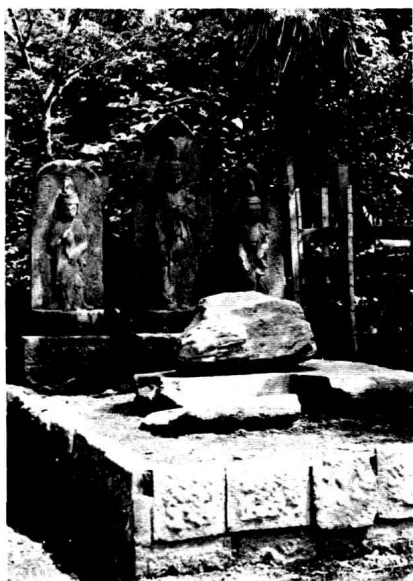
されることで、かえつて伏姫の胎内に「氣」をのこす。

いっぽう、伏姫の「純潔」は獸にさえ菩提心をおこさせたものの、しかしわが身はどうかというに、犬頭人身の異形の者と交つてゐるのではないか。

「有一日伏姫は、硯に水を滴んとて、出て石滴を掬給ふに、横走せし止水に、うつるわが影を見給へば、その体は人にして、頭は正しく犬なりけり。思ひかけねば堪ぬばかりに、吐嗟と叫びてはしり退きつ」

ここでもう一度、「否定」がなければならぬ。「氣」を受けたものは、その失われた「けじめ」を回復するため、死んで純潔をあかさなければならぬ。死による「否定」が、最後の、最終の、否定としてあらわれる。

伏姫の割腹自殺は、いわば八房の否定の、さらにもう一つの否定である。たんなる獸性の否定ではなく、獸性を否定したあげくでできた「物類相感」の、もう一つの否定なのである。したがって、富山は馬琴の胸中の夢幻境である



「八大佐」の最後、回外刺拳に挿入されている馬琴の肖像。馬琴と向いあつて、諸国廻遊の頭陀が描かれている。

千葉県市川の里見城址にある伏姫夜泣き石。